
アイリッシュ

K E N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイリツシユ

【Nコード】

N4512J

【作者名】

KEN

【あらすじ】

主人公最強系の物語です、更新は不定期なので暇潰しに読んで頂けたらと思っています。

プロローグ

誰もが能力を使える世界アイリツシュ、ここアイリツシュでは誰もが何らかの能力を持って生まれてくる

今から1200年程昔にこの世界に魔物が出現した、魔物は沢山の人々を殺し人類は滅亡の危機にさらされていた。だが、魔物の出現より後に生まれた人々は不思議な力を所持していたのである。人類はその力を使い魔物と対抗できるまで力を伸ばしていった。そして人と魔物の均衡が保たれ今の世界が出来上がったのである…

辺境の山奥にある小さな村カシイ村：

そこに新たな命が産み落とされた、彼はケイ・アダーガと名付けられた。

皆さん初めましてKENです

主人公最強系の作品になりますのでその所をヨロシクお願いしま

す m (| |) m
次回は主人公の能力が明らかになります

能力開花！！

「今日が能力が明らかになる日か」

俺の名前はケイ・アダーガ今日で12才になる。この世界アイリツシュでは12才になると自分が生まれたときから持っている力が覚醒し、自分がどんな能力をもっているかを知ることができるのである

「ケイ起きたのなら早くご飯を食べに来なさい！！」そう居間から声が聞こえてきた。

「すぐ行くよ母さん」そう言って自室から居間に向かった。

「おはよう母さん」俺が挨拶すると母は「おはよう」といつもの返事をかえした、母の名はアイリーン・アダーガこの村一番の美人として知られている。ちなみに父は4年前に村を襲った魔物との戦いで命を落としている。

「もう12才になったのね、体にいつもと違う感覚があると思うけどどう？」

「確かに何か何時もと違うな、でも俺の体に馴染む感覚があるから心配ないと思うよ。」

そう伝えると母は

「とりあえずご飯を食べ終わったら村長様のところに行きなさい。」
と言ってきた。

とりあえず直ぐにご飯を済ませ村長のところに行くことにする。

《村長宅》

「おはようございます村長ー！！」

「おはようケイ君、君はいつも元気だね」村長は何時もと変わらない返事をかえす。

「君は今日で12歳だったな、能力が知りたくて来たのかい？」

「はいそうです」そう答えると部屋の奥に通された。

「私の能力は【他人の能力を見る】というものだ。こういう能力はあまりないから街に1人ぐらいしかいないんじゃない。村にいるのは珍しいのだぞ」

そう言いながら俺の能力を見ている。

「それでどのような能力なのですか？」

「ケイ君の能力は【空間を操る】ことみたいじゃない」

「それって凄いんですか？」

「初めて聞く能力だが凄いじゃろう」

どれくらい凄いか気になるな。

「どんなことが出来る様になるんですか？」

「うむ、能力で見たところ沢山あるが例えると、別の空間に物を入れておけたり、上手く使える様になれば空間をねじ曲げて別の場所に一瞬で移動出来る様になったりもするみたいじゃない」

（もしかしてそれってすごい？）

そんなことを考えながら気になることを聞いてみる。

「それでどうやって出来るようになるの？」

そうこれが一番大事である、凄くても使えなければ意味などないのだ！！

「自分の中にあるものを引き出すのじゃ！！　そしてやりたいことを思い浮かべるそうすれば出来る様になるじゃろう。」

ケイは目を瞑り自分の中にあるものを引き出そうとしてみる

（異空間に繋げてみよう）

心の中でやりたいことを思い浮かべてみる。

「おお！！成功したぞ！！」

村長の声を聞いて見開いてみると直径30cmほどの穴が開いていた。

「此を入れてみるといい」

そういつて差し出されたのは村長宅に来るときに来ていた上着だった。

入れてみると確かに中に入るようだ…

「すげ〜！！此が俺の能力か！！」

ケイは自分の能力に感動を覚えていた

「一番能力をけしてもう一度使ってみよ」

村長の言われた様になると…

「服が消えた〜！！」

そう、同じ様に作ったのに服が消えていたのだ

「うむ…では服を取りだそうとおもってもう一度使ってみよ」

言われたとおりに服を取りだそうと思いなながら能力を使うと服が入った空間が現れた。

「うむ…どうやら取り出したい物を思い浮かべることによって取り出せる用だな」

「成る程ね〜村長ありがとうもつと色々試してみるよ！！」

ケイは村長の言葉も聞かずに外に飛び出していった…

「何故だか知らんが運動能力と記憶能力が信じられない程に上がっているようじゃ…空間を操ることと全く関係してないと思うのだが…って！！何処に行ったのじゃ！！話は最後まで聞かんか〜！！」

能力開花！！（後書き）

早く本編に入りたいので3年ほど飛ばそうかな〜って思ってた
りします（ ）
3年の間にめちゃくちゃ強くなってる設定で、3年間の話は外伝と
してかく予定です

まだヒロインの名前すら決まっていけないので次回の更新は暫くお待
ち下さいm（ ）m（ ）m

学園都市グラニット（前書き）

時間が上手く取れたので思ってたよりも3日間も早く完成しました
o (^ - ^) o

学園の説明がちょっとありますがあとから付け加える予定です。

ちなみにヒロイン登場!!

名前を考えてなかったので即席ですがそこらへんは許してください

m (_ _) m

ではどうぞ

学園都市グラニット

「明日から学園か…」

ケイはそんなことを呟きながら学園都市であるグラニットに向かっていた。

能力が使える様になって3年、その間沢山のことがあったがその話は後々しようと思う。

「大陸一でかい学園だ！！とか言ってたけど王都よりは狭いんだろ
うな、でも楽しみだな」

ところで何故学園に行くことになっているかというところ、15歳になる者全員が学園に行くことが義務付けられているからである。

この世界で能力が現れてからその能力を使った犯罪等も増えて来ていたと言つのもあるが、能力に慣れてきて自分の力量を過信して暴走する者たちが出たのが15〜18歳ほどの時期が最も多いからである。実際、学園が出来てから能力を暴走させてしまう者たちが大分減って来ているのだからこの政策は成功だと言えるだろう。

学園は義務化されているだけあって授業料や寮、食べ物などの最低限は無料になっているので誰もが安心して子供を送り出すことが出来るようだ。配られる物とは別に購入することもできる様だが、基本的にはお金が無くても生活できるようになっている。

学園都市内でのバイト等も充実している様だからお金を手に入れることもできるみたいだ。

学園では能力によってその力にあった学科に分けられるらしく、《商学科》、《冒険学科》、《薬学科》、《鍛冶学科》、《傭兵学科》に分かれている。

《冒険学科》、《傭兵学科》に適している能力の場合は初めにどちらの学科に行くかを選ぶことが出来る、因みに俺は《冒険学科》に行くつもりだ。

ケイが知っているのはこれくらいだが学園に行けばもっと詳しくわかるだろう。

3時間後：

「これが学園都市グラニットか、確かにでかいな！」

ケイは学園都市の門の前に立って辺りを見回していた。

「君は新入生かい？」

声がした方を見ると門兵が立っていた。

「はい、ケイ・アダーガと言います。」

「じゃあケイ君、学園への入学書が送られて来ている筈だからそれを見せてくれないかい？」

そう門兵にいわれ鞆から書類を取りだし門兵に見せた。

「確かにこの学園に入る者のようだな、歓迎するよ。」

そう言つて鷹が描かれた赤色の校章を渡された。

「この校章は学年によって色が違うから一目で学年がわかる様になっている、ちなみに今の二年生は青色で三年生は黄色だ」

「詳しく教えてくれてありがとうございます」

ケイは門兵に礼をいってグラニットに入ることにした

(まずは寮に行こうか)

そう思い歩き出したのはいいが寮の場所を知らないことに気付きとりあえず近くにいる人に聞いて見ることにした。

「すいません、寮の場所を教えてくださいませんか？」

直ぐ近くを歩いていた女子生徒(校章が青色だから二年だ)に聞いてみると

「私も今から寮にもどる所だから一緒に行うか？」

(カツコいい!! 新入生ね!! 仲良くなっちゃお) と思っているのを上手く隠しながら素っ気なく返事をした。

「ありがとうございます先輩!! 俺の名前はケイ・アダーガっています。」

「私はシルヴィア・ロストバークよ シルヴィアってよんでね」

「分かりましたシルヴィア先輩」

「先輩は知らないわよ!!」

「しかし…」

「しかしじゃない!! ちゃんとシルヴィアってよんで!!」

「わかりました…シルヴィア」

「よろしい!! これからよろしくねケイ」強引にシルヴィアと呼ぶように言われたケイはちょっと疲れていた

「ところで先…シルヴィアは何学科何ですか？」

先輩と言おうとしたところシルヴィアから無言の圧力がかったので直ぐに言い直し気になることを聞いてみた

「私は冒険学科ね ケイ君は？」

「俺は冒険学科に行くつもりですよ」

と答えると

「じゃあ一緒なんだ〜楽しみだね〜」

と何故か嬉しいそうにしていた

「でも学年が違うので一緒に授業受けるわけではないですよね？」

「まあそうなんだけどね〜(ニヤニヤ)」

「? あっ!! ここが寮ですか!!」

「そうよ、ここが男子寮であっちが女子寮になるんだよ」

「寮もめっちゃくちゃ大きいですね」

「そりゃ全生徒12000人全員がはいれるんだもんね、じゃあ私は寮に戻るから明日の始業式頑張っつてね また明日!!」

そう言っつと走っつて女子寮にかえっつて行っつてしまった。

(シルヴィア可愛かつたな〜)

そんなことを考えながら寮にはいるケイだった。

学園都市グランニット（後書き）

思ってたよりも話が進まなかった（^ー^；）
本当は入学式の日直前まで行く予定だったんですが…

寮にて（前書き）

短くてすいません m () m

寮にて

「ここが男子寮か…」

「新入生かね？」

ケイが周囲を見渡していると近寄って来た男性が声をかけてきた。

「はい、ケイ・アダーガといいます。もしかして管理人さんですか？」

「ああ、ここの管理人を勤めているラフィール・マグネスだ、ケイ君これからよろしく頼むよ。」

「こちらこそこれからよろしく願います。」

ケイはラフィールさんにこの寮でのルールとこれから住むことになる部屋を教えてもらった。

この寮のルールは朝の7時〜7時30の間が朝食の時間でそれに遅れると食えることができないということだ。同様に夕食も19時〜20時と決まっているようだ。

他にもシャワーを使える時間帯や洗濯物を出す時の注意点、寮に備え付けてある地下訓練場の使用の際の注意点等があった。

ケイはそれらのルールを把握した上で2階にある自室を見に行くことにした。

ちなみに1、2、3階は1年生が4、5、6階は2年生が7、8、9階が3年生と言うように分かれているようだ。

寮の中に階段は無く代わりに魔方陣のような物にのることによってその陣が行きたい階まで動いてくれる

もつともケイは空間を2階に繋げて移動したので陣に乗ることはなかったのだが。

「ここが俺の部屋か」

ケイはそう言う中に入ってみた

「結構広いんだな…」

部屋は1人で住むには十分な広さがありベッドと机と収納棚がおい
てあった。

「とりあえず必要な物を用意するか。」

ケイは空間から本棚やソファア―を出して自分好みの空間に替えてい
く。

「こんな感じでいいかな？」

ちなみにソファア―と本棚は空間を遠くの店にあった物に繋げて拝借
してきたものだ…

「せっかくだから隣の部屋の男に挨拶に行くか！！」

ケイが外に出ようとしていたら扉を叩く音が聞こえてきた。

「お隣さ〜ん！！挨拶に来ただけだけど入っていい？」

そう言ったがケイの返事も聞かずに中に入ってきた。

「勝手に入って来んなよ！！」

「ワリいな！！来るのが遅かったから待ってたんだ！！部屋もう模
様替えしたのか！！早いな〜」

こいつ絶対悪いと思ってない…

と思いつつも聞いてみる

「で、お前誰？」

「名前言うの忘れてたか！！俺はジョン・マクレリーだ！！」

「そうか、俺はケイ・アダーガだよろしくなジョン！！」

2人は自分の出身地などを紹介して仲良くなることができた。

「明日は始業式だから一緒にいこうぜ！！」

「いいだろう、明日8時にお前の部屋に行くからそれまでにちゃん
と準備をしておけよ。」

「わかってるって、じゃあまた明日な」

「ああ、また明日。」

ジョンが出て行ったあと疲れていたのか直ぐに眠ってしまった。

始業式（前書き）

書いた後に気がついた…

入学式がないことに…

入学式は始業式と合同と言っことで勘弁して下さい！！！！

始業式

次の日朝食をすませたケイがジヨンの部屋にいくと中から慌ただしい音がしていた。

「おいジヨン早くしないと置いて行くぞ!!」

「もうちょっと待ってくれ!!すぐ行くから!!」

待つこと5分…

「おはよー さあ行こうぜ」

「慌ただしかったが何があったんだ?」

「いや、昨日貰った校章が見つから無くて探してたんだよ」

「1日で物を無くせるとはすごいな…」

「何かバカにされてる気がするんだけど…」

(バカにしてるに決まってるだろ!)と思いつつも

「気のせいだろ」

と言っておいた。

「まあいいか、取りあえず講堂に集合みただし早くいこうぜ!置いて行くぞ!!」

「お前が遅れたんだけどな…」

ケイの呟きは聞こえなかった様で返答もないまま講堂の方に向かっていった。

「あつ!!俺、能力使えば一瞬でいけるじゃん」

ケイはジヨンを放って置いて講堂の近くに空間を繋げて移動することにした。

講堂前にて

先に講堂に着いたケイはジョンを待っていた

「ケイ！！いつの間に俺を抜かしたんだ？」

「結構前に抜かしていたと思うが？」

「何っ！！俺は走りには自信があったのにこの俺を抜き去るとは…」
ジョンはシヨックで地面に頭を叩きつけていた

本当のことを言ってもいいが面白いので放っておくとする

講堂の中に入ると人がいっぱいになっていた

「全学年が集まるところまで多くなるのか… 流石に12000人は多いな」

「確かに多いな〜 おっ！！あそこの席空いてるみたいだしあそこに座ろうぜ」

ジョンはそう言うつと1学年の集まる席の空いてる席に向かっていった。

「すみません、隣座ってもいいですか？」

ジョンと話していると隣から声がした。

「良いですよ」

「ありがとね 私アリサ・ジェスカー、こっちがリン・クトネシリ

かっっていうのよ、これからよろしくね」

「初めまして…」

どうやらツインテールの女の子がアリサでセミロングの女の子がリンという名前らしい

「俺はケイ・アダーガだ」

「俺はジョン・マクレリーだジョンって呼んでくれ!」

ジョンは女の子と知り合いになれたからかテンションが高いようだ
「そう言えば聞いて無かったけど皆はどの学科に行くつもりなんだ?
因みに俺は冒険学科だ!」

「「「俺(私)もだ(ですよ)」「」」

「へへ、皆同じ学科か!」

「おいジョン、始業式が始まるみたいだぞ」

ケイの声で話を中断し始業式が始まるのを待つことにした。

30分後…

「長い……………」

「あの教頭先生いつまで話す気なんでしょうか…」

さらに30分後：

「では最後に学園長の話です」

教頭の話して死んでいた生徒たちが最後ということ復活した
「新入生諸君、グラニツトによろこそ！！　そして2年、3年生の
諸君今年も頑張ってくれたまえ！！」

5分後：

「最後に重大な発表がある！！」

それを聞いた生徒たちは何事かと息を呑んで学園長の話しに耳を傾ける

「今年から他のアイリツシユ全地域の学園と合同でこの地グラニツトで武闘会が開かれることになった！！1週間に及ぶ代々の行事になるのでそのつもりでいるように！！また同時に商業科の生徒は露店を出すことを許可されるので薬学科、鍛冶学科のものたちと合同で店をだしてもらってもかまわない、皆が楽しめる様に頑張ってくれたまえ！！」

「武闘会だつてよ！！」

「店が出せるんだつて！！一緒に出さないか！！」
生徒たちはテンションが上がったのか騒ぎだした。

「ああ、あと武闘会の為に2人一組になつてもらつ。誰と組んでもいいので決めておく様に！！」

「これで始業式は終わりとする！！今年1年頑張ってくれたまえ」
学園長はそう言うと言つて行った

「では新入生諸君は学科を決めるので順番に奥の部屋に入ってくれたまえ！！」

司会を勤めている先生（名前は知らん）が指さした所には5つのドアがありそこで学科を決めるようだ…

「パートナーを決めるのは新入生の学科が決まった後にするので2

年、3年生はもう少し待っていないさい。」

ケイの順番が回ってきた

「失礼します」

中に入ると1人の男性が座っていた

「ケイ・アダーガ君だね」

「はい」

「私はランス・カトラス、冒険学科の担当をしている。」

「挨拶はこの程度にしてまずはこれに手を置いてくれ」

「これは何ですか？見たことも無いんですが…」

「これは手を置いた者の能力を知ることのできる物で学園にしかないものなんだ」

（そんな物があつたんだ…）

ケイはそう思いながらも四角い箱の様な物手を置いてみる

「よし、もういいぞ」

先生がそう言ったので手を離すと四角い箱からカードが出てきた。

「【空間を操る】か…こんな能力聞いたことがないな… どの学科に入れればいいのかわからんな」

「冒険ギルドに所属しているので冒険学科がいいのですが…」

ケイは困っている先生に希望を言ってみる

「冒険ギルドに入っているのか、なら冒険学科でいいだろう」

（そんなに簡単に決めていいのかな？ まあ希望する学科だから全然いいんだけどな）

先生はカードに何かを書き込んでケイに差し出した

「これはケイ君の能力と所属学科が書かれているから無くしたりしないように」

「あとは講堂に戻って少しの間まっていなさい、学科ごとに座る所が決まっているから間違えないように気をつけるんだ」

「わかりました、失礼しました」

ケイはそう言って部屋からでて冒険学科の席に向かった

始業式後（前書き）

時間が取れたので早く更新出来ました

ではどうぞー！

始業式後

冒険学科の集まる席に腰をおろしたケイは知り合った3人を待つことにした。

「ケイさんも無事冒険学科に入れたんですね」

「クトネシリカさんか、その様子だと君も入れたみたいだね」

「出来ればリンと呼んで欲しいんですが…」

「わかった、これからはリンと呼ぶことにするよ」

それからケイとリンは2人で話しをしながら他の人達を待った。

アリサとジョンも無事冒険学科に入れたらしく此方に座りに来た。

「そう言えば冒険学科は冒険ギルドへの加入が出来るようになるみたい」

「じゃあ明日でもギルドに行ってみようぜ！！依頼も受けて金も手に入るしな！！」

（俺はもう入っているんだがまあ付いていくとするか）

3人はギルドに入れることに期待を抱き、ケイは今までのギルドでの実績を無くせると面白いかな〜などと考えていた。

全員の学科分けが終わったようだ

「新人生の学科分けも終わったので解散としたいと思うが《冒険学科》、《傭兵学科》の生徒たちは残ってくれ！！」

そう先生が言うと沢山の生徒が講堂の外へと出ていった。

「今から武闘会の為のパートナーを決めてもらうことになる。」

「二人一組になって貰うが、学年、学科は関係ないので組みたい者

どうして組んでくれ!! では始める!!」

先生の言葉で生徒達は自分のパートナーを探す為に動きだした。

「なあケイ、俺と……」 「おはようケイ 私と組まない?」

「おはようシルヴィア、丁度パートナーが居なくて探していたところなんだ」

「やった じゃあ決定ね」

ジヨンの言葉は無情にもシルヴィアの声に掻き消され、ケイに届くことは無かった。

(ケイのやつあんな美人の先輩といつの間にしりあつたんだ? まあいい、後で殺してやる… まあ俺にもリンちゃんとアリサちゃんがいるじゃないか!!)

ジヨンはそんなことを考え、リンとアリサの方へ行くことにした。

「御免ねジヨン君、私たち2人で組むって決めたから」

ジヨンは三角座りをしていじけることになった。

「ケイさんはパートナー決まったんですか?」 「ああちよつと待ってて、おいシルヴィア!!」

ケイは他の先輩と話していたシルヴィアを呼んだ

「どうしたのケイ? あら、あなたたちは?」

シルヴィアはケイの隣にいた2人の後輩をみてそう言った

「私はアリサ・ジェスカーです」

「私はリン・クトネシリカといいますケイ君とは友達です」

「私はシルヴィア・ロストバークっていうの、よろしくね」

「「よろしくお願ひしますロストバーク先輩!!」」

苗字で呼ばれたのが気にいらなかったのかちよつと頬を膨らませながら

「シルヴィアって呼んで欲しいな」

といていた。

「「わかりましたシルヴィア先輩!!」」
先輩という言葉は抜けていなかったが機嫌を治したようだ。

「あの、シルヴィア先輩はケイ君を知っていたみたいですけどどういった関係なんですか?」

アリサは気になっていたことを聞いてみることにした

(これはいい質問ね ちよつとからかつて見ようかしら?)

シルヴィアは頭の中でそんなことを考えながら爆弾発言をした

「彼女よ」

ケイたちはシルヴィアの発言に顔を真っ赤にして動かなくなってしまうた

「ほつ、本当なんですかケイ君!!」

真っ先に我を取り戻したリンがケイにたいして問いかける

「.....」

ケイは顔を赤くしたまま動かない

「ちよつとやり過ぎたかな、さっきのは嘘だからね」シルヴィアはらちが明かないのでちゃんとフォローをすることにした

この言葉で残りの2人も起動しただのだが、また爆弾が投下されることとなる

「でもケイのことが好きなのはたしかだからケイさえ良ければ直ぐに付き合いたいな」

ケイはまた顔を真っ赤にして動かなくなってしまうた

「シルヴィア先輩、今の発言は2人っきりの時にするものですよ！」
アリサは頬を赤くそめながらいった
「今度からは気をつけることにするわ」
その後は話が変わりいろいろなことを話していた
ケイは動かなかったが2人はシルヴィアと仲良くなれたようだ

その頃ジヨンは

アリサたちにも忘れ去られ、1人寂しく座っていた
そしてその後、彼は同じ様に萎れていた男を発見し、無事パートナー
ーを見つけたことができたのであった。
彼の名前はオハン・ハルベルトといった
ケイとオハンは気が合う様で直ぐに仲良くなることができた。
そしてまたジヨンは忘れ去られてしまった

「誰か俺に構ってくれ〜!!」
「ジヨンの悲痛な叫びが誰かに届くことは無かった」

始業式後（後書き）

名前って難しいですね

思い浮かばない時は武具の名前をつけてます

不定期更新ですがこれからもよろしくお願いしますm()m

キャラ紹介1 (前書き)

名前の由来が武具のキャラは武具の説明が載ってます！(b^_^)

キャラ紹介1

《ケイ・アダーガ》

性別 男

身長 178cm

体重 61kg

髪の色 黒

能力 【空間を操る】

本作の主人公、見た目は誰が見てもかっこいいと言っぐらいかっこいい、性格は女性にはやさしいが男性には厳しい。

空間を操ることができる。別空間に繋げて移動したり、異空間に繋げて物を保管したりなどすることができる。他にも出来ることは沢山あるみたいです。

アダーガは盾の名前です。アダーガの源流はモロッコにあり、初めは盾に短剣が付いているだけのシンプルな形状でしたが14世紀以降に両端に槍の穂先がつけられ14〜15世紀にかけてヨーロッパに伝わり16世紀頃まで使用されていたそうです

《シルヴィア・ロストバーク》

性別 女

身長 160cm

体重 ?

髪の色 黒

髪型 ポニーテール

能力 【水を操る】本作品のヒロイン、黒髪美人で学園ではファンクラブが結成されている。

成績は学年トップで次期生徒会長に名前があがっているようだ
水を操ることができる。水を氷にかえたり霧状にしたりなど、バラエティーに富んだ戦い形もできる。

《ジョン・マクレリー》

性別 男

身長 180cm

体重 68kg

髪の色 金

能力 【身体強化】

本作品の馬鹿キャラ

身体強化は使うと素手で岩を簡単に砕けるようになる。また、身体を鋼の様に硬くすることもできるが、動きを早くすることはできないようだ。

《アリサ・ジエスカー》

性別 女

身長 158cm

体重 ?

髪の色 赤

髪型 ツインテール

能力 《火を操る》

本作品の主要キャラの1人
火を自在に操ることができる。火を使う能力の中でも上位に当たる
爆発も使うことができる。

《リン・クトネシリカ》

性別 女

身長 150cm

体重 ?

髪の色 緑

髪型 セミロング

能力 《風を操る》

本作品の主要キャラの1人

風を操ることができる。また、風の派生の雷も操れるが、本人はあまり戦いが好きではないので補助か探索として能力を使うようにしている

クトネシリカはアイヌの口承叙事詩『ユーカラ』に登場する神刀のことだそうです

ちなみに言語学者の金田一京介はクトネシリカを「板杖丸」（いたどりまる）と訳しているそうです。

《オハン・ハルベルト》

性別 男

身長 175cm

体重 64kg

髪の色 金

能力 【先読み】

本作品の主要キャラの1人
未来を見ることが出来る。制限が強く最大で5秒先までしか見る事が出来ないが、相手の動きがあらかじめ分かっているので正面から戦う場合まだ負けた事がない

剣の扱いに長けている

オハンはケルト神話に登場する魔法の盾のことです

この盾には持ち主に危険が迫ると絶叫をあげて知らせる不思議な力があつたと言われています

ハルベルトは又の名をハルバートともいい語源はドイツ語の「ハルム（棒）」と「ベルテ（斧）」をあわせたものです

16世紀末までヨーロッパ全土で主力武器として使用されてました

《ランス・カットラス》

性別 男

身長 179cm

体重 66kg

髪の色 青

能力 【土を操る】冒険学科の教師の1人

学園の先生の中でもトップクラスの實力の持ち主

土を自在に操ることができ、派生として木を生えさせたりすることができる

防御のスペシャリストでもある

ランスは中世ヨーロッパで使われた全長3〜4メートルの長槍で、脇に抱えるように構え、馬ごと突進させて敵を突き倒すようにつかったという。

カッタラスはラテン語でナイフを意味する「クルテル」が語源とされ日本では舶刀ともよばれる。
その名のとおりによく船乗りが用いていた。海賊が愛用した武骨な短刀である。

《ラフィール・アグネス》

男子寮の管理人

《アイリーン・アダーガ》

ケイの母親

《村長》

カシイ村の村長 能力は【他人の能力を見る】

《門兵》

名もない門兵

キャラ紹介1（後書き）

キャラの設定はとてつもなく難しいということに気がつきました…
能力とか良いのが思いつかないです（^| ^:）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4512j/>

アイリッシュ

2010年10月24日05時56分発行